

難波利三

貧人同穴



実業之日本社

芸人同穴

著者／難波利三

*

初版第1刷／1993年8月25日

発行者／増田義和

発行所／株式会社実業之日本社

東京都中央区銀座1-3-9／振替東京1-326
郵便番号104 電話03(3562)2051〔編集〕(3535)4441〔販売〕

*

印刷所／大日本印刷

製本所／共文堂

*

©T. NANBA, Printed in Japan 1993
落丁、乱丁本は小社でお取りかえいたします
ISBN4-408-53203-7

難波利三
芸人同穴

実業之日本社

装画／村上 豊
装幀／安彦勝博

芸人同穴◆目次

芸人同穴げいにんとくけつ

5

鯨を見たか

33

虹の橋

61

やさしい嘘

89

愛しのわが家

117

隣りの青春

143

あの子

171

夫婦めおとうどん

201

別れの出発

223

やさしい一日

253

遅れ咲き

279

芸^{げい}
人^{にん}
同^{どう}
穴^{けつ}

1

楽屋の出入口に十数人の女の子らが群がっている。セーラー服姿も何人か目につく。

笑々亭楽助は立ち止まった。そこを通らなければ外へは出られない。次の高座に上がるまでの時間つぶしに、パチンコでもするつもりだった。

〈難儀やな〉

ジャンパーの腕を組み、舌打ちした。この女の子達の群れを突破するにはどうすればよいか、つかの間、思案した。

群れの中に一人、男が混じっている。埋まるように小柄な、白髪の手が見え隠れする。この劇場の雑用係の野川さんだった。

声は出さず、しかし懸命に、野川さんは女の子らを追い払おうとしていた。両手で誰彼なく背中を押し、出入口から外へ出そうとする。

が、女の子らは全く意に介する様子もない。

「なんやの、このおっちゃん」

「いやらしいな、もう」

と、一人か二人が軽蔑のまなざしを向け、逆に突き返す。小柄な野川さんはよろけ、体勢を立て直しては女の子らに向かう。だが、彼女らはいっこうに応える気配はなく、賑やかな喋り声を

まき散らす。野川さんは軽くあしらわれ、無視された。

へよし」

楽助は野川さんを助けようと思った。女の子らの図々しさに腹が立った。

「こら、お前ら」

一声喚き、楽助が歩み寄ろうとしたとき、女の子らはいっせいに悲鳴まじりの歓声を上げた。

野川さんをはじき飛ばすようにして、群れは大きくざわめいた。楽助の大声に驚いたわけではなかった。

いま関西で人気絶頂の若い二人——砂田雅夫と杉本裕二が姿を現わしたのである。

「雅夫クーン」

「裕ちゃん！」

口々に叫びながら、女の子らはたちまち二人を取り囲んだ。黄色い声を浴びせかけ、ところかまわず身体に手を触れた。

「ちよつと、堪忍してくれよ」

「僕ら、これから本番やねん。もう時間がないねん」

「通して、通してくれよ。さあ除いた、除いた」

二人のマネージャーも一緒になって、女の子らを振り払おうとした。野川さんも必死に押し除けようとする。が、反対に突き返され、その場に尻餅をついた。

楽助は駆け寄り、野川さんを抱き起こした。

「大丈夫ですか」

返事はなく、見返す野川さんの目には明らかに、

〈おおきに〉

という色がにじんでいた。

「除け、除け、除いてくれ」

マネージャーが強引に群れをかき分け、砂田雅夫と杉本裕二はようやく脱出した。楽屋の玄関先へ駆け込み、女の子らが追ってこないことを確かめてから、

「おっちゃん。しっかりしてくれなかなわんな」

「ほんまや。なんの役にも立てへんやないか。女の子もよう整理せんのなら、そんな仕事、やめたらええんや」

「犬でも飼うといったほうが、まだましやで。セパードなら、すぐに追い払いよるぞ」

もみくちゃにされた腹立たしさもあるのだろう。砂田雅夫と杉本裕二に同調して、マネージャーまでが野川さんののしを罵った。

「ちよっと待て」

そのまま楽屋へ行こうとする三人を、楽助は呼び止めた。聞き捨てならなかった。三人は驚く顔を向けた。

「いま言うた生意気な台詞せりふ、もう一ぺん、この俺の前で言うてみい」

氣配を察して引き止めようとする野川さんの手を払い、楽助は三人の前に立ちはだかった。本

当に言い返してくれば、容赦はしない。殴りつけてやるつもりだった。三対一で、しかも若い者相手では負けるだろうが、そこまで考える余裕はなかった。

「すみません、師匠。女の子らがキヤアキヤア騒ぐので、つい頭に血が昇って、とんでもないことを口走ってしまいました。堪忍して下さい」

マネージャーが頭を下げた。芸の先輩である楽助に、逆らっては損だと判断したらしい。マネージャーは砂田雅夫や杉本裕二より少し年上の、三十間近だった。

「この人を、誰だと思ふとるんや」

三人を睨みつけながら、楽助は語気を強めた。野川さんが再び背後から、腕を引いた。言ってくるなという合図のようだった。

楽助は一瞬、迷った。が、怒った感情にブレーキが利かなかった。

「ただの雑用係やと思うたら、大間違いやぞ。そのむかし、一世を風靡した芸人さんや。お前らの大先輩やぞ」

その先、楽助はまだ続けようとしたが、野川さんが何度も強く引き止めるので思いとどまった。かつての名声を知られるのは、心づらいのかもしれない。野川さんには、戸惑い気味に輝いた。なにも知らなかったらしい。

野川さんには迷惑かもしれないが、なにもかも本当のことを教えておくほうが、若い芸人にとつても、後々、なにかの勉強になるかもしれない。楽助はそう思ったが、そのとき丁度、

「時間がありません。急いで下さい」

と、係の者が呼びにきた。

「すみません。それじゃ師匠、行かせてもらいます」

マネージャーが慌てる素振りを見せ、砂田雅夫と杉本裕二も、

「すみませんでした」

「すみませんでした」

と、声を合わせて謝った。

「今度、妙なことをぬかしたら、承知せんからな」

楽助は念を押した。言い足りない気がしたが、仕方がなかった。三人はもう一度、

「すみませんでした」

と、揃って頭を下げ、楽屋へ急いだ。楽助の後ろで野川さんは、気弱そうに目をしばたかせた。

2

むかしはそうではなかった。野川さんは向こうっ気の強い、喧嘩っ早い芸人だった。

楽助が師匠の笑々亭楽朝に弟子入りした二十年前ごろが、野川さんの全盛時代であった。ハッピー圭太・竜子の夫婦漫才は毎日必ず、どこかのテレビかラジオに出ていた。奥さんの竜子が突

つ込みで、圭太の野川さんがボケ役の漫才は、絶妙な味があった。どの劇場も二人を目あての客で溢れた。無論、トリ（おしまい）を務める大看板だった。

師匠の付き人として楽屋入りする楽助などは、怖くてそばへも近寄れないほどの存在であった。「ぼちぼち頑張るまひよか」のギャグは、子供達までが口にするほど大流行した。

二人は礼儀作法に厳しく、ことに圭太の野川さんのほうは、自分の弟子以外でも容赦なく、なにかと口うるさく注意する癖があった。

「挨拶は歩きながらするもんやないぞ。きちんと立ち止まって、相手のほうへ顔を向けて、それからするもんや。よう覚えとけよ」

そう言つて、楽助も何度か叱られた覚えがある。それぐらいだから、若い芸人だけではなく、師匠連中からもしささか煙たがられていた。

人気絶頂、向かうところ敵なしの勢いだったハッピー圭太・竜子も、十年ほど前、竜子が病死してピリオドを打った。以後、野川さんは一人で漫談をしていたが、全盛期に比べると人気はさっぱり上がらなかつた。夫婦漫才のイメージが強烈だっただけに、面白味にも欠けた。

それでも細々と、野川さんは漫談を続けていたが、三年前、喉頭ガンに罹り、声帯を切除してから、舞台に立てなくなつた。声を使う商売の芸人に、その病氣は酷だった。息の根を止められたのも同然であつた。

いまは性能のよい発声器が開発されている。訓練次第では日常会話に支障のない程度の声も出る。

だが、商売にする声となると、やはり難しい。客が納得しないかもしれない。

野川さんの本来の声は浪曲師に似合いそうな、太くて洪い響きがあった。その声にファンもついていた。本人も自慢にしている声だった。

それを失ったのである。衝撃の深さは想像に難くない。

むかしの声への未練を断ち切ろうとしてか、そのまま残しておきたいと考えてか、野川さんは発声器の使用を拒み、訓練も受けなかった。常にメモ用紙を持ち歩き、用件は筆談ですませる。なまじ自分の声に自信があっただけに、器械に助けもらいたくないのかもしれないなかった。

漫談ができなくなった野川さんは、かつて大看板として何回となくトリを務めたことのあるこの劇場で、雑用係として働くことになった。子供のいない野川さんは、自分で働いて生活の糧を得なければならなかった。

楽屋の雑用係としては、芸人や面会者の履物を整頓したり、勝手に押しかけてくるファンをさばく仕事もある。黙ってできる仕事なら具合はよいが、今日のような場合だと困ることになる。大声で制止することができないからだ。

それでも雇われているのは、劇場側の温情だった。かつての大看板への、お情けと言えた。

声を失い、舞台に立てなくなつてからの野川さんは、急に老け込み、弱気になった。常におどおどと、なにかに怯えるような素振りを見せた。向こうっ気の強い、喧嘩っ早いむかしとは、まるで別人のようだった。声を失うと、人間、臆病になるのかもしれない。そんな野川さんを見るのが、楽助は悲しかった。初めのころは、雑用係として黙々と働く野川

さんに会うたび、

〈ざまあ見ろ〉

と、痛快な思いさえした。口うるさく、小言を言われたむかしが甦り、意地悪なよろこびを感じた。

だが、そのうち、楽助の気持ちに変化が生じた。哀れを催した、というのが本当かもしれない。

楽助は売れない芸人の一人である。噺家としての看板は上げているものの、二十年余りのこれまでの芸人稼業のうち、陽の目を見たという思いはただの一度もない。テレビやラジオのレギュラーは一本もなく、高座だけの収入では生活できないため、地方回りの余興で喰い継いでいる。中学と小学校に通う子供がいるが、父親だけの稼ぎでは養えないので、家内がパートに出ている有様だった。

野川さんほど華やかなスポットライトを浴びた経験がないので、雑用係になったいまの気持ちはどうなのか、楽助には分かりにくい。が、決して暗れやかな、よい気分であるはずはなかった。

あれほど売れた芸人でさえ、末路はこうである。とすると、売れていない自分は、これから先、どういうことになるのか。老後はさぞみじめではないか。

野川さんを見ると、楽助は自分の行く末を見せつけられているような気がしてならなかった。売れていない分だけ、もっと悲惨な目を味わわなければならないのではないか。

そんな思いがあつて、つい同情めいた心がのぞいた。野川さんの姿が、近い将来の自分と同じに映つて仕方がなかった。

砂田雅夫と杉本裕二らの悪口を聞いて、楽助はそんな感情を爆発させたが、それは単に野川さんをかばつての行為ではなかった。この二人の若者は漫才師でもなく、落語家でもなく、そういう粋を取つ払ったところで、言うなればアイドルタレント的な売れ方をしている。漫才や落語ができるわけではなく、歌が歌えるのでもなく、ただ二人が喋るだけで若い女の子らは大よろこびする。大して面白くもない話のやりとりに、大爆笑を繰り返す。

芸人ではなく、俳優ではなく、強いてこじつけるなら「タレント」としか言いようがない。まだ二十歳を出たばかりのそんな二人が、人気者になつて大騒ぎされるのが、楽助には面白くなかつた。二人が出演する日は、楽屋口にも女の子らが群がっている。また、テレビやラジオ番組の都合で、二人の出番は狂うことが多く、今日も楽助が先に舞台を務め、彼らの遅刻を補つたのである。

そんな場合でも、砂田雅夫と杉本裕二はお詫びの挨拶をしない。師匠につかず、お笑いの養成所出身の二人は、楽屋での礼儀作法に欠けていた。口うるさく教える者がいないので、なにも知らないようだった。

礼儀知らずで生意気な奴ら。売れっ子だと思つて鼻にかけている——。

楽助はそんな目で二人を眺めた。いつか機会があれば、がつんと言つてやろうと考えていた。それが今日、到来したのである。野川さんにかこつけて、自分の鬱憤晴らしをしたようでもあ

った。おかげで楽助の溜飲は下がった。

3

数日後、楽助が二度目の高座を務め、ジャンパーに着替えて楽屋を出ようとすると、野川さんが歩み寄り、メモ帳を差し出した。

ちよつと、付き合ってくれまへんか。

ボールペンで、そんな走り書きがしてあった。

「私のかまいまへんけど」

パチンコでもしてから家に帰るつもりだった楽助は、そう答えた。

おおきに。ほな、ちよつと待っておくんなはれ。

野川さんは再びメモ用紙にしたため、楽助に見せた。それから事務室へ急ぎ、コートに手を通しながら引き返した。あと二つほど出しものが残っているが、早引きするつもりのようなだった。

「ええんですか、もう帰っても」

楽助が訊くと、野川さんは大きく頷き返した。

劇場の裏手には飲み屋街がある。入り組んだ路地が這い、スナックのネオンや小料理屋の軒灯、いっぱい飲み屋の赤提灯などが連なる。馴れた通りらしく、野川さんは早足で先に歩いた。いくつか角を曲がり、路地の奥まったところにある格子戸の前で野川さんは足を止めた。楽助